
隙間

樹侑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隙間

【Nコード】

N2362C

【作者名】

樹侑

【あらすじ】

文化祭の翌日、あいつは寂しそうに笑った。

「どうしよっかな…」

振り向くと、あいつは困った様に笑っていた。
両手に小さな物体をいっぱい持って。

「何したの？」

あたしが聞くと、あいつは手の中身を見せてくれた。

「…リード？」

「そ。リード。」

ここは、吹奏楽部が練習に使っている倉庫の様な建物の二階。

いつもなら90人近い部員が練習しているのだけど、今日はオフだからか、あたし達の他には2、3人の先輩達がいるだけで、それぞれが楽譜の整理や楽器の整備に没頭していた。

あたし達は、この部活でサクスを担当していた。

でも、あいつは昨日の文化祭での演奏会で、部活を辞めた。

「空を飛ぶために、この部活を辞めることにしました。」

一か月前に、あいつは静かな声でそう宣言した。

空が好きで、飛行機が好きで、しょっちゅう空港に行って飛行機の写真を撮っては、同じパートの先輩に見せたりしていたから、「ああ、もう決めたんだ」って、すっとん理解出来た。

「なんでそんなにたくさんリードがあるの?」

「俺、溜め込む癖あるんだよね…ひとついらない?」

「…保存状態良ければ欲しいけど…」

「全部欠けてるよ」

「そんなの要る訳ないじゃん!」

笑いながら突っ込むと、あいつは笑った。

覇気がない笑顔。

昨日みたいな笑顔。

昨日の演奏会。

プログラムの最後の曲。

あいつはソロを担当していた。

Tempo rubato

美しく、やわらかくて、懐かしくて

それでいて哀しい、切ない旋律だった。

あいつは、男ならではの肺活量と、男とは思えない濃やかさでそのソロを吹いた。

そして、吹きながら泣いていた。

溢れてくる涙を拭いもせずに。

それを見てたあたしも目頭が熱くなってきて、困った。

「泣くつもりなかったんだけどなあ」

演奏会が終わって、舞台袖に戻った時、あいつは笑いながら言った。

「今日、練習あるの？」

「うん。あと30分くらいしたら先輩も来るよ。」

「ふうん。じゃ、それまでに帰りますかね。」

「そう。」

今日は午前中は文化祭の後片付けで、午後は休みになっているのだが、吹奏楽部はパート毎の練習が入っていた。といっても、さすがに文化祭の直後ではみんな疲労困憊な状態だから、大体どのパートも個人練扱いで、パートで練習するのはサククスぐらいのただけ……多分これはパートリーダーの先輩の底なしの体力のせいだろう。

あたしは手早くサククスを組み立てて、音出しを始めた。

ひとつひとつの音を確認める様に、ゆっくりと伸ばしてゆく。

30分後、先輩がやって来た。

「練習始めるよ……！」

「はい。」

回りを見渡すと、あいつはもういなかった。

その日の練習は最悪だった。

みんなクタクタに疲れていたせいか、集中力に欠けていた。

最初のうちは

「ちゃんと集中して」とか注意してた先輩も、やっぱり無茶だと認識したのか、2時間の予定だった練習を、1時間で切り上げてくれた。

5

フラフラしながら楽器を分解して、ケースにししまうと、そのケースを持って楽器庫に行く。

サックス専用の棚の前に立つと

あいつの楽器がないことに気付いた。

もう、持って帰っちゃったんだ。

寂しくなんかない
そう思ってた。

朝練に遅刻しても
楽譜を家に忘れて来ても
全く悪びれなくて
そんなあいつが妬ましかった。

だから寂しくなんかないと思ってた。

だけど

あいつがどれだけ吹奏楽が
サククスが
好きだったか、知ってたから

ただただ、哀しかった。

棚の中の、楽器ケースひとつ分の隙間は、そのままあたしの心の中の穴になった。

ケースを棚に押し込んで、荷物を持って外に出た。

自転車をこいで家路に就く。

あんなにやわらかい、濃やかなサクスの音は、もう聴けないかもしれない。

それでも良い。

きつと、ずっと

あたしは覚えてるから。

あの旋律は、まだ耳の奥に残ってるから。

ありがとう。

でも、言ってなんかやんないからね。

あたしは纏わりつくモノを振り切る様に、自転車を走らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2362c/>

隙間

2010年12月22日02時25分発行